明石の史跡（１９）白隠禅師と龍谷寺

　臨済宗寛延３年（１７５０）冬、妙心寺派中興の祖として名高い白隠禅師（６６歳）が、明石の龍谷寺（材木町）に赴き、「息耕録」を提唱した。「息耕録」とは、白隠が述べたもの東胡が編集し、寛保３年（１７４３）開版された「息耕録開莚普説（そっこうろくかいえんふせつ）のことで（国書総目録５．３３２頁）、提唱というのは、「禅宗において、師が語録を講義したり、宗旨（根本精神）を明らかにする際に、その大要を提起して自在に説法すること」（仏教語大辞典下．９７６頁）をさす。

　翌年の春、岡山の少林寺に招かれるまで、逗留していたようである（『飛騨路と白隠』１０９頁、なお白隠の明石滞在については、観音寺住職神足守正師のご示教による）。

　白隠は、駿河国駿東郡原（沼津市）の生まれ。１５歳で当地の松蔭寺において得度。修行を積み重ね、享保２年（１７１７）、松蔭寺の住持。その後、各地より招請に応じて、精神的に臨済禅の発展に努めた（国史大辞典１１）。おそらく明石行きも、龍谷寺からの招きに応えたものと思われる。

　「金毘羅さん」や「黒髪塚」で知られる龍谷寺（妙心寺派）は、近世以前から存在しており、元和５年（１６１９）、小笠原忠真の母の菩提寺として保護を受け、寺域の拡大とともに峯高寺と改名。ところが小倉移封にともない、峯高寺も移転。その跡地に、天叢和尚が開山したのが、今日の龍谷寺につながる（新明石の史跡１３４－５頁）。

　白隠を迎えた明石の臨済宗の動向については、未詳としかいえない。しかしながら、港町として栄えた二見の観音寺（二見町東二見）に、白隠の紙本墨画が、複数存在するところからも、影響の程は察知できるものと考えたい。

龍谷寺

日本歴史学会会員 茨木 一成